

# G・H・ミードの「社会的行動主義」についての一考察

——パースペクティヴ論を中心として——

長田 攻 一

はじめに

「シンボリック相互作用論」をめぐる今日の混迷状況は、この立場に立つとされる諸研究が、一方で、さまざまな個別理論へと分化していくとともに、他方では、エスノメソドロジーやドラマトゥルギーなどの境界について、多様な論議を生みながらも、明確な認識を欠いたまま、自らの基本的立場をますます曖昧なものとしているところにあるといえよう。この立場の命名者であるH・ブルーマーが、基本的に依拠したのは、その師、G・H・ミードの思想であった。さまざまに批判にもかかわらずH・ブルーマーのG・H・ミード解釈は、近年に至るまで一定の影響力を保ち続けてきた。その背景には、一九六〇年代末期に台頭してきた「ラディカル社会学」運動の流れの中で、いわゆる「エスタブリッシュメント社会学」に対する批判の旗手の一人としてのブルーマーの立場への支持があった。その批判のトーンの強

さへの共感は、とくにシンボリック相互作用論者たちに、ブルーマーの立論の整合性への関心や疑問の深化と顕在化を阻んできたといえよう。このことは、一方ではブルーマーを通じてのミード解釈が、一つの有力なミード像としてある範囲の人びとの間に定着する傾向を促すとともに、他方では、ミードの理論それ自体への関心と再検討の機会を多少とも制限する結果を招くことにもなったにちがいない。しかしながら、それにもかかわらず、全般的にみてミードへの関心は決して衰えることなく、断続的ではあれ新たな遺稿集や研究書がその後も出版されており、近年ますます高まる傾向をもみせている。近年のこのような新しい傾向の一つとして、ミードの理論の哲学的基盤への関心の高まりを指摘することができる。それは換言するならば、ミードの理論に依拠しつつ分岐し発展していった個別諸理論の行きづまりの妥開の方向や、新たな深化の可能性を、ミードの全体像の再検討を通じて、あるいは新たな把握のしかたの中に探ろうとするものであるといえよう。C・マックフェイル、C・レックスロートとH・ブルーマー

の間で、近年（一九七九～八〇）に行なわれた論争（McPhail and Perrott: 1979, 1980; Blumer: 1980）および J・D・ルイス＝R・L・スミスによる、アメリカ社会学のメタ理論的基礎としてのプラグマティズムの再検討の試み（Lewis and Smith: 1980）は、この傾向を例証するものである。本論の狙いは、これらの事例の中で提起された諸問題の中から、とくに、G・H・ミードの思想の基本的特質と意義を再検討する上で、重要なものの一つである「パースペクティヴ」の概念に注目し、それとの関連で、彼の「社会的行動主義」について若干の検討を試みることである。まず、議論の前提として、ミード思想の哲学的基盤への近年の関心の狙いを探るために、マックフェイル＝レックスロートとブルーマーの論争、および、ルイス＝スミスのメタ理論的考察の要点を概観し、次に、かかる狙いにある程度依拠しながら、ミードの「パースペクティヴ」の概念の基本的特質を概観する。さらに、その特質との関連において、ミードの「客観性」と「主観性」、「普遍」と「個別」の概念、さらには「創発性」と「創造性」の概念を検討することによって、「社会的行動主義」の方法論的特質とその可能性についての検討のための足がかりを得る、という順序において議論を進めることにしたい。

## 一

G・H・ミードは、その最も広く知られた著書、『精神・自己・社

会』(Mead: 1934)の中で、自らの立場を「社会的行動主義 (social behaviorism)」と規定している。マックフェイル＝レックスロートのブルーマー批判の狙いも、この社会的行動主義をメタ理論レベルにさかのぼって検討し、その方法論的含意を確認しようとするところにあるといえよう。ブルーマーは、自らをミードと同じプラグマティズムの立場に立つと主張するが、彼らは、この両者の哲学的基盤の内容は全く異なったものだと言張する。ミードの社会的行動主義は、観念論と實在論を克服するものとしてのプラグマティズムに立脚する。すなわち、リアリティは観察者の側にのみある（観念論）のでもなく、対象の中にある（實在論）のでもなく、両者の関係として成り立つところの、パースペクティヴの中にある、というのがその基本的立場である。これに対してブルーマーは、一方において、科学的探求が関心をもつのは、「われわれに反論 (talk back) し、……挑戦的で抵抗し……われわれの心像や観念に屈服することのなげ」(Blumer: 1969, 46)、経験的世界の「自然の進行しつつある性格」(Blumer: 1969, 46)に関心をもち、としながら、他方においては、「伝統的な観念論の立場は、『現実の世界』は人間経験の中のみあり、それは人間がその世界を『見る』形態の中のみ現われる。私はこの立場に議論の余地はないと思ふ」(Blumer: 1969, 22)と述べている。そうすると、B・グラスナーの言うように「もし世界がわれわれの見るようにわれわれの経験の中のみ存在するなら、何がわれわれに反論 (talk back) するといふのだろうか」(Glassner: 1980, 15)という疑問が生じる。マックフェ

イル・レックスロートは「彼（ブルーマー）は、ミードのプラグマテイズムが観念論者と実在論者のギャップを克服しようとした、社会的行動主義の立場を全く採用しようとしなう」（McPhail and Rexroat: 1979）と述べ、そのためにブルーマーは、「観念論と実在論の間を揺れ動いている」（McPhail and Rexroat: 1979）という結論を導くのである。そして、ブルーマーのこの存在論のレベルでの矛盾は、彼の「シンボリック相互作用論」の方法論の展開において、ますます顕わになってくる。

ブルーマーは、自分の「シンボリック相互作用論」の立場は、とりわけG・H・ミードの思想に依拠しているが、ミードはその基盤を与えただけであり、その思想の中に「単に暗示されているにすぎない多くの決定的に重要な問題を、明示的に取扱う」（Bunce: 1969, 1）ような、自分自身の方法論を發展させる必要を感じた、と述べている。これに対して、マックフェイル・レックスロートは、ミード自身、ブルーマーよりはるかに明確かつ詳細に、自らの社会的行動主義の方法論を展開していると反論する。彼らは、ミードとブルーマーの科学の方法を、科学的探求行為（act of scientific inquiry）の観点から、探求の前提、探求の開始、仮説、仮説の検証、探求の諸結果、という五つの局面に分けて詳細に検討しているが、ここではその細部についての議論に立ち入ることはさし控え、その結果の要点のみを指摘しておく。まず第一に、ブルーマーは、その存在論的立場の矛盾を反映して、一方では、個別的で固有な性格をもつ経験的世界の存在を強調し、研究

者はその対象の中に分析的要素間の関係（理論）を発見することが必要だとしながら、他方では、発見された理論的枠組は研究者の主観や既存の概念によって歪められる可能性があるもので、それをつねに経験的世界に照らして吟味しつづけなければならないとし、結局、同じ土壤の上を永久に足踏みしつづけることになってしまう。この点は、客観性の根拠を社会のバースペクティヴに求めるミードの立場とは全く異なる。したがって第二に、ブルーマーは、対象となる行動に、発見されるべきものとして、意味と特質を帰属せしめる傾向が強くなり、本来は研究者の反応としてあらわれる対象の意味や特質を、他の研究者が共有することによって確立すべき、研究結果の客観性の確証（collaboration）の方法と手続きが全く示されていない。そして第三に、ブルーマーは「研究者が行為者の見地に立つ」ことを要求する、いわゆる「主観主義的な方法」をミードの正統的な方法として主張する傾向があるが、ミードの社会的行動主義は、内面的な行動への注意を喚起してはいても、いわゆる内観的な方法（introspective method）を明白に拒否していることである。この点はとくに、ミードの社会的行動主義について一般に誤解のあるところである。<sup>(2)</sup>

この論争は、マックフェイル・レックスロートの最初の主張（一九七九年）に対する、ブルーマーの反論（一九八〇年）によって開始されたが、ブルーマーの反論は、自らの従来の主張の繰り返しに終止し、提起された批判点を説得的に反駁するだけの論拠は示されないうまま、マックフェイル・レックスロートのさらに徹底的な再反論に合い、結局

相互に噛み合うことなく終息している。

ほぼ時期を同じくして発表された、ルイス・スミスの『アメリカ社会学とプラグマティズム』(Lewis and Smith: 1980)も、同様に、C・S・バース、W・ジェームズ、J・デューイらとの比較において、とくにG・H・ミードの理論の存在論的基盤の検討を意図したものである。

ルイス・スミスの場合の分析のキー概念は、スコラの意味での實在(念)論(realism)と名自論(nominalism)であり、これを「社会」に適用することにより、ジェームズとデューイを社会名自論の側に、バースとミードを社会實在論の側に位置づける。彼らは、プラグマティズム一般にみられる共通項よりもむしろ、その内部にある相違に注目することにより、それぞれの思想家のメタ理論的基盤の特質をより一層明らかにするとともに、とくにミードの方法論的特質を浮き彫りにしようとする。本論の目的は、彼らの問題提起を踏まえて、ミードの社会的行動主義の特質と問題点を検討することにあるので、ここでは彼らの議論の道すじを詳細に辿ることはやめて、むしろ本論の意図に関わりをもつ範囲で、ルイス・スミスの主張するポイントを要約しておく。

ミードとデューイの基本的立場は一般に共通点が多いことが指摘されているが、ミードが哲学的に實在(念)論の立場をとるといふ観点に注目するならば、両者は明らかに異なり、ミードは、コミュニティと普遍(universals)の中心的重要性を強調するバースの立場に近いとするのが彼らの主張の骨子である。ミードは、意味シンボルを社会的行動主義が扱う唯一の客観的データであるとし、決して主観主義的

方法を提唱しているわけではない。そしてその客観性の基盤こそ、ミードのバースベクティヴ論にあり、そこにこそミードの實在(念)論的傾向を理解する鍵があるとするのである。「普遍的なもの(universals)は個別的なもの(particulars)に先立って客観的に實在する」というのが、スコラの實在(念)論の公準であるが、ミードやバースの場合、普遍性や客観性は究極的には社会のバースベクティヴに基づけられる、という意味で、彼らは「社会實在論」の立場に立つとする(ルイス・スミスはミードとバースの「普遍的なもの」を「限界づけられた一般性(limited generalis)」(Lewis and Smith: 1980, 20~3)と呼ぶ)。かくしてルイス・スミスの主張の特徴は、「ミードの仕事は、一般的哲学的實在論と社会實在論の交差する地点に立つ」(Lewis and Smith: 1980, 116)という解釈の中にあるといえよう。「デュルケームの集合表象、あるいはミードのバースベクティヴによってとらえられた対象以上に客観的な対象はない。ホワイトヘッドやミードが整合的な集合(consistent set)と呼んだものとの関連で生じる探求以上のより高度な客観性の探求は、哲学者に不可知のリアリティを指定せしめ、彼らを解答不可能かつ不必要な難問に巻き込むことになった」(Lewis and Smith: 1980, 129)という指摘の中に、ルイル・スミスの結論と信念が要約されているといえよう。

以上みてきたように、マックフェイル・レックスロートとルイス・スミスの主張に共通しているのは、ミードの思想のメタ理論的分析の必要性の訴えである。しかし前二者が、社会的行動主義的方法的系統

きにより関心を示しているために、ブルーマー理論の存在論的レベルの矛盾を指摘するにとどまり、ミードの存在論的特質を明確にするに至っていないのに対して、後二者は、ミードの存在論的特質がそのパースペクティヴ論にあることを指摘し、その内容を詳細に説明している。しかしながら、ルイス・スミスにしても、ミードのパースペクティヴ論の概略的特質を指摘するにとどまり、彼の客観性や普遍性の概念そのものの特質を検討するには至っていない。本稿では、彼らの問題提起を踏まえ、ミードのパースペクティヴの概念の特質を、客観性と主観性、普遍性と個別性、創発性と創造性などの概念にまでさかのぼって検討することにより、ミードの社会的行動主義の基本的特質に迫りたい。

## 二

ミードのプラグマティズムの意図は、精神と自然とを明確に区別する、デカルトやロックの二元論の克服であり、とくにそこから帰結する絶対的パースペクティヴの仮定の克服であった。すなわち、絶対的パースペクティヴを認めると、個人のパースペクティヴはすべて主観的、非現実的なものとなり、進化 (evolution)、革新 (novelty)、創発 (emergence)、創造 (creation) などはすべて無意味となる。ミードの問題は、あらゆるパースペクティヴの背後に絶対的パースペクティヴを想定することなしに、しかもパースペクティヴの客観性の根拠をど

こに求めたらよいかというものであった。

ミードのこのような問題を解決するための糸口を与えたのは、A・N・ホワイトヘッドの、相対性の理論 (relativity theory) にもとづくパースペクティヴの考え方であった。<sup>(3)</sup> ホワイトヘッドによれば、四次的なミンコフスキーの世界の中で経過する諸事象 (events) を考えた場合、それらの事象の経過する秩序は、それらの事象のうち「知覚力ある事象 (a percipient event)」（すなわち有機体）によってとらえられた「一つの共軛的集合 (a cogredient set) としてあらわれる。知覚力ある事象としての有機体は、それ自身が存続するだけの時間的広がりが必要とし、それによって区分された時空の中で、他のすべての事象は、その有機体との関連において、時間的経過の各時点での空間的配置パターンの集合として、一つの統一体として同時性 (simultaneity) の中で知覚される。有機体によってとらえられた、このような「諸事象の一つの共軛的集合」が、ホワイトヘッドのいうパースペクティヴである。すべての事象は、異なる有機体との関連で、異なるパースペクティヴの中におかれるのであり、したがって無限のパースペクティヴの中におかれるチャンスをもつことになる。自然 (nature) は、このような複数のパースペクティヴのシステムとしてとらえられる。「自然が有機体に依存的 (patient) である限りにおいて、自然は複数のパースペクティヴに層化されるのであり、それらのパースペクティヴの交差 (intersections) が自然の創造的前進 (creative advance) を生み出すのである」(Mead: 1932, 163)。

ミードがホワイトヘッドから学んだのは、パースペクティヴは有機体によって生ずるが、それは決して有機体の側にのみ帰属せしめられるものでも、環境の側にも帰属せしめられるものでもなく、それ自体が自然の一部だということであった。したがってこの観点からすれば、第一に、すべてのパースペクティヴは、自然の中に客観的に実在するものとしてとらえられ、絶対的パースペクティヴを仮定する必要はなくなるとともに、第二に、ある事象をめぐる異なったパースペクティヴの交差は、自然の創造的前進を生み出す、という重要な含意が得られることになったのである。

ミードは、このようなホワイトヘッドの考え方を、社会科学、行動主義的心理学の観点に取り入れる。彼は社会科学、行動主義心理学におけるパースペクティヴの概念の重要性を、次の二点において強調する。「第一に、この考え方〔諸事象についての異なったパースペクティヴの組織を自然そのものとしてとらえる考え方〕は、いかなる社会科学にとっても必ずその主題となるように思われる。社会科学それ自体が関心を寄せる人間経験は、まず第一に個人の経験である。……たとえば環境的諸条件は、それらが現実の個人に影響を及ぼすかぎりにおいてのみ、そしてそれらが諸個人に影響を及ぼすものとしてのみ存在するのである」(Mead: 1932, 165)。そして「第二に、社会が生起し、その諸事象が科学的探求の対象となるのは、個人が自分自身のパースペクティヴにおいてのみならず、他者のパースペクティヴにおいて、とくにある集団に共有されるパースペクティヴの中で行為するかぎり

においてのみである」(Mead: 1932, 165)。この観点からミードは、独自のパースペクティヴ論を展開する。ここでは、その要点を、パースペクティヴの成分としての、有機体、環境、社会的行為などの側面に分けて簡単に述べるとともに、パースペクティヴと客観性、普遍性などとの関連について述べていくことにしよう。

### 三

パースペクティヴは、有機体との関連でのみあらわれる。「パースペクティヴは、知覚者と知覚されるものとの関係から生じる。そして何にも増して客観的にそこにある」(Mead: 1932, 281)。すなわち、パースペクティヴは、有機体と環境との関係の中にあられるのではなく、むしろ有機体と環境があるパースペクティヴの中におかれることである (Miller: 1973, 21)。しかし同時に、パースペクティヴが成立するためには、有機体の側にも、環境の側にもその前提条件が必要である。たとえばある物理的事物の色(いわゆる「第二性質」)<sup>(4)</sup>、「青」という属性は、一方では有機体が青を識別する生理学的構造をもっていなければ経験されえないが、他方では、光の波を青のスペクトル帯で反射する条件の中にその事物がおかれていなければならない。すなわち、その事物は、一定の環境の中におかれていても、青を識別する構造をもつ有機体なしには、青の属性を可能<sup>(5)</sup>性<sup>(6)</sup>としてのみもつにすぎ

ない。「この意味で、ジョン・スミスの目に入る前の、また誰かの目の前にある、本の色は、それが経験されるための前提条件なのである」(Mead: 1938, 25)。有機体の経験はかかる前提条件なしにはあり得ない。しかもミードによれば、あらゆる経験の究極的基盤は、第二性質についての「離隔経験 (distance experience)」ではなく、物理的事物の第一性質(表面、内側など)への「接触経験 (contact experience)」である。本の色は、その本が自らの位置から離れたところにあることを仮説的に示す、記号として経験されるにすぎない (Miller: 1973, 57)。われわれが究極的に本の存在を経験するのは、それらに接触し、その抵抗を経験するときである。物理的事物についての人間の経験は、このような離隔経験と接触経験の二つを含むことを、ミードは繰り返して強調する。

このことは実は、バースペクティヴが人間の社会的行為の文脈で問題にされていることを反映している。すなわち、バースペクティヴは、人間有機体が知覚しうるあらゆる事象を、一定の行為のプランの中に秩序づけるような枠組として理解される。このような「行為のプラン」の中に秩序づけられた諸事象 (em ordering of events)こそが、その個人にとっての環境を構成する。ミードは、有機体の行動を環境への適応過程 (adjustment process) としてとらえる。それは衝動 (impulse) をもって始まり、その衝動のエネルギーの解放としての達成 (consummation) をもって終る。しかし人間の行為は、衝動から達成へと直結するものではなく、対象を操作 (manipulation) するための内的

反応過程としての知覚 (perception) をともなうものとされる。この、衝動、知覚、操作、達成の四局面 (Mead: 1938, 3~25) のうち、さきにもみた離隔経験は知覚段階に、接触経験は操作段階に特徴的なものとされる。知覚と操作を含むこの媒介過程は、他者の態度を取得し、自らを対象化しうる能力、すなわち自己および精神の生成とともにあらわれる。行為の文脈において、バースペクティヴが重要なかわりをもつのも、この媒介過程である。個人有機体は、行為の知覚段階において、「いま」という現在<sup>(6)</sup>の中に、過去と未来、こことそこといった時空の広がりや内的に生み出し、行為の背景、行為の対象、行為の方法、行為の諸結果などすべての要素を、その時空の内に組織化し秩序づける。バースペクティヴは、行為の文脈からみた、かかる諸事象の秩序づけをさすが、厳密に言えば、それは仮説的プランであるうちは、実在的なものとはいえない。知覚段階を特徴づけるのは第二性質の記号をとおして、物理的事物の存在を経験する、離隔経験であるが、ここでは、未来の操作段階でのその対象との接触経験も、シンボルの働きをとおして、過去の経験を踏まえて仮説的に実現される。かかる仮説的な行為のプランが実行に移され、有機体が環境に適応することが確証されるとき、そのバースペクティヴは客観的に実在するものとなり、それは普遍的経験として蓄積されることになる。すなわち、その行為のプランに従って行為する場合に、それが適的な結果をもたらすならば、その行為パターンは反復可能な論理的恒常性をもつことになる。かかる論理的恒常性をもつ行為パターンは、個人の経験の内部に蓄積

されることにより、新たな行為場面において、行為を導くパースペクティヴの基盤となる。また他方ではその論理的恒常性の度合に応じて、その行為パターンは、シンボルをおして多少とも他者に共有可能なものとなり、コミュニケーションのすべての他者に共有されるに至ったとき、それは普遍的なものとなる。かくしてミードは、最終的に次のようにいう。「したがって、パースペクティヴの客観性を構成するのは、個人有機体のパースペクティヴが全体的行為パターンと一致することであり、有機体はそのパースペクティヴの内部で行わしめるほどに、そのパターンとかかわることである。その全体的社会的行為のパターンは個人有機体の内部にありうる。というのは、かかるパターンは、いかなる有機体といえどもその行為を反復できるような、手段的手続きき(Implemental things)をおして実行に移されるからであり、これら

の反復行為は、他者および有機体自身に対して、有意味シンボルによって指示(Indicate)することが可能だからである」(Mead: 1932, 174-75)。

自らの社会心理学の中にとり入れられたミードの「パースペクティヴ」の概念は、かくしてつねに共有可能性を前提としたものであるということが出来る。そしてこの共有可能性の根拠は、反復可能な行為パターンの論理的恒常性、すなわち普遍性にはかならない。かかる普遍性こそがパースペクティヴの客観性の根拠ともなっているのである。この意味で、ミードにとってパースペクティヴへの関心の焦点は、その客観的実在性の根拠となる普遍的論理であり、またその普遍的論理

の修正と進化であって、個人の個別的ないし主観的行為ではないといえよう。

#### 四

「パースペクティヴは客観的に実在する」(Mead: 1932, 161; 1938, 110)というのが、ミードの主張の重要な位置を占めることは明らかである。しかしながら、この考え方は、主観と客観を新たな観点から定義する必要を生み出すことになった。ミードは次のように述べる。

「個人の世界は、彼と同じ社会的パースペクティヴの中にいる他者には接近しうるとしても、彼に属するものは、大部分、彼だけが接近しうるという事実をもって、有機体としての彼の経験は、主観的であるということとはできない。それらの経験が主観的なものとなるのは、彼が自らの行為を決定するなかで、いまだ到達されていない現実の代行者となるときだけである」(Mead: 1938, 115)。それに続いて、主観的な経験の例として、感情、イメージ、観念などをあげる。たとえば、感情は、行為の態度を決定する実際的な客観的諸特質の代りとして機能することが多いという。すなわち、感情の赴くままに行為すると、応々にして環境への適応に失敗するという例を思い浮べれば理解しやすい。イメージや観念もその多くは、個人が最初の反応にもとづいて、必ずしも合理的とはいえない解釈によって生み出され、その行為のプランの中で適合的な位置を占めるはずの態度の代行者となることに



よって、主観とみなされるのである。M・ナタンソンは、未来の経験の代行者を主観とみなすなら、知覚の中で成り立つ離隔経験や仮説的な接触経験はすべて主観的なものとなる危機に立つ、という趣旨の疑問を提示している(Natanson: 1973, 38; 訳九〇一)が、この疑問は重要な点をとらえてはいても、当を得ているとはいえない。なぜなら、ミードは、知覚段階において、行為の端緒を構成する態度が有機体の反応にもとづいていればすべて主観的だといっているのではなく、その行為が実際の適応を可能にすることに失敗するような、不適切な仮説を採用する場合の意識的経験をさして、主観的といっているからである。この場合、ミードが強調している次の点を忘れてはならない。

つまり、パースペクティヴは、その客観的実在性を確認するにあたって、仮説が提起された段階において、仮説を構成する論理からの演繹によって、あらゆる問題事例に対する、その仮説の有効性をチェックするという点である(Mead: 1938, 82~3; 1964, 198~9)。ナタンソンは、この点には全く言及していない。この点では、ミードのいう「主観」を、「誤った仮説(false hypothesis)」あるいは「実在しないもの(the unreal)」と規定するD・L・ミラーの方が、ミードを忠実に理解しているといえよう(Miller: 1973, 137)。ミラーは、ミードが、思考(thinking)に因して、まず第一に、他者と共有される有意味シンボルによって自らの内部に反応を生み出す段階と、第二に、その最初の反応にもとづいて、自らの後の行為を導くための新たな反応、の二つを区別していることに注意を促す(Miller: 1973, 149)。これは、

ルーマーの「指示(indication)」と「解釈(interpretation)」に対応すると考えてよからう(Blumer: 1969, 5)。ミードの「主観」の入り込む余地をもつのは、後者の段階、すなわち「解釈」の段階においてである。そして重要なことは、ミードは、この二段階を含む思考過程によって、新しいシンボル、仮説の構成を行なっているとすることである。一つの行為のプランを仮説的に構成するとき、最初の反応にもとづいて生じる新しい反応は、まさに彼独自のものである。しかしながらすでにみたようにミードは、その新しい反応によって組織された仮説の有効性は、通常、その論理的演繹手続きの中で検証されることを重視していることを見落してはならない。しかも、その検証の手続きはすべての人に接近しうるものであることによって、その客観性が獲得される条件が整うのである。すなわち、ミードは主観性の概念を排除してはいないが、決してそれを重視するわけではなく、むしろ、重視するのはつねに客観的に実在するものとしてのパースペクティヴであり、それを構成する普遍的論理を内包する(connote)ものとしての有意味シンボルなのである。「すべての存続する諸関係は、修正をうけている。残るのは論理的に恒常的なもの、および論理的含意からの演繹である。いわゆる普通や概念も同じカテゴリに属する。普通や概念は一つの言説世界(a universe of discourse)の要素であり構造である」(Mead: 1934, 90; 訳九九)。この言説世界こそ「一般化された他者」(Generalized other)であり、これを構成する基本的要素こそ普遍なのである。

このようにみえてくると、ミードにおいて、「客観性 (objectivity)」と「普遍性 (universality)」とはほとんど同じ意味で用いられていることがわかる。しかしながら、客観と主観、普遍と個別は、同軸上の区別と考へてはならない。すでにみたように、主観は誤まった仮説であり、その論理から演繹された行為のパターンが、環境への適応を可能にしないことを意味するのに対し、普遍に対する個別とは、普遍的論理を反映する具体的事例を意味するがゆえに、その論理に従った具体的行為は、環境への適応を可能にするはずだからである。すなわち、普遍とは、有意義シンボルの内包 (connotation) であり、個別とはその外延 (extension) を構成する (Miller: 1973, 80)。客観と主観、普遍と個別の概念をめぐる以上の相違を踏まえると、ミードの「創発性 (emergence)」と「創造性 (creativity)」に関して、次のような概念上の区別をしなければならないように思われる。すなわち、創発性には、普遍的論理に従って具体的行為が現われることを意味する場合と、新たな普遍の創造をさす場合の両方が含まれるということである。ミードにとって、個人の行為は問題の解決を意味するが、この問題の解決を可能にする仮説には、一般化された他者としての普遍から演繹される仮説と、普遍に対する例外を説明するために創造される仮説の二種類が区別される。個人の行為は、つねに創発的ではあるが、必ずしもつねに創造的であるわけではない。この意味で、新たな普遍の創造に關してのみ「創造」という語を用いるならば、「創発」とは、普遍的行為パターンの個別的展開と、新たな普遍の創造の両者を含む広い概

念として理解することができよう。もし創造と創発を全く同一のものとみなすならば、ミードの普遍性の概念は、全く意味をなさないものとなる。なぜなら、あらゆる個人の行為がつねに新たな仮説を創造することになってしまえば、そこには他者との普遍の共有可能性の余地はなくなることになるからである。自己や精神は、つねに、普遍的な一般化された他者のパースペクティブ、あるいは個別的な他者のパースペクティブの共有を前提としている。たとえそれが後者のパースペクティブであっても、それが普遍的論理から演繹されるものであるならば、それは一般化された他者に一致するものであり、またそれが、普遍に対する例外を説明しようとする仮説であるならば、それは一般化された他者に対する挑戦であり、新たな普遍の創造である。自己は創発的であり創造的なものではあるが、主観的なものではない。なぜなら、創発や創造は、同じ集団に属するすべての成員に理解しうる有意義シンボルを通じて達成されるとともに、すべての成員に共有される普遍の創造こそが創造の名に値するからである。

以上みてきたような、ミードのパースペクティブ論の特質、客観性と主観性、普遍性と個別性、創造性と創発性の概念を踏まえることによって、次に彼の社会的行動主義的方法論的特質を簡単にながめることにしよう。

## 五

ミードはさまざまなパースペクティヴの中でも、とくに科学のパースペクティヴに関心があつた。「ミードは、諸パースペクティヴの、とくに科学のパースペクティヴの普遍的シンボルをとおして、世界を解釈し理解することに関心があつた」(Lewis and Smith: 1980, 126)とするルイス・スミスは、おそらく正しい。ミードの多くの考察は、科学のパースペクティヴの修正と発展を説明することに捧げられている<sup>(8)</sup>。

科学者は、つねに普遍的な形態において世界を提示しようとする。しかし「科学は、ものごとの性質についての形而上学的ドグマから脱出し、それが観察する諸事象の秩序づけ (the ordering of events) へと立ち戻っている。科学は、その法則を一様性 (uniformities) をもって提示する。しかし科学は自らが示した言明を変えようとする意がなくなっている」(Mead: 1936, 275)。その変更は、科学者のパースペクティヴを支える普遍性が、それに対する例外的事実に出会うときにはじまる。ここで重要なことは、ミードは「例外的事例は、疑問の余地のない客観的世界の内部でのみ生じる」(Mead: 1964, 200) のであり、したがって、「科学者や研究者が解決しようとする葛藤は、例外と法則との間のそれである——決して、ある法則と別の法則、ある普遍性と別の普遍性との間の葛藤ではない」(Mead: 1936, 135) と明確に述べてい

ることである。このことは、例外的事実は、それが例外としてあらわされるパースペクティヴそれ自体の全面的再構成を迫ることを意味する。そしてその例外的事実を説明するためには、その事実と関連する他のすべての事象をも説明しうるような、新たなパースペクティヴ、すなわち諸事象の新たな秩序づけが必要となる。「通常、事実 (facts) またはデータ (data) という用語によって内包されるものの範囲は、古い理論と新しい理論との間にある領域に属する」(Mead: 1964, 173) のであり、かくして「科学者の主要問題は、パースペクティヴからパースペクティヴへの翻訳である」(Natanson: 1973, 37; 訳八八)。そして確かに、ミラーの指摘するように、例外的事実を発見するのは個人であり、「個人が、新たなパースペクティヴの創造の源泉である」(Miller: 1973, 209)。つまり、例外的事実に遭遇した個人は、それを説明しうる仮説を立て、その仮説をまず「思考による検証 (the mental testing)」にかけ、さらに「実験と観察による検証 (the experimental or observational test)」にかける (Mead: 1938, 82~3) ことにより、そのパースペクティヴの普遍性が確認されることになる。仮説、思考による検証、実験による検証というこの三つの段階こそ、ミードの科学の方法の基本である。この三つの段階は、C・パースの、アブダクション、ダイダクション、インダクションにそれぞれ対応することとは明白である。思考による検証とは、仮説の中にある論理構造からの個別的行為の演繹であり、実験による検証とは、その行為の実行による適応可能性の検証を意味する。

ミードの社会的行動主義の方法も、このような科学の方法の手續きを前提としている。社会的行動主義は、個人の有意義な身振りを観察の対象とする。<sup>(9)</sup>そこで得られたデータは、それを説明しうる一般化された他者の普遍的論理の追求のための仮説、思考による検証、実験による検証という段階の手續きの中で、処理されることになる。そこでは、観察の対象となる行為者の身振りは、研究者のベースペクティヴの中で他の事物や身振りとともに一定の論理的整合性をもつような仮説の中に整序されなければならない。対象者の身振りの意味を説明しうるためには、その仮説はその身振りの中にある普遍的論理を反映するものでなければならない。そのとき研究者は対象者の態度を取得するのであり、その意味で、研究者は行為者の観点に立つといえる。しかしながら重要なことは、その行為者の観点は決して主観的なものではなく、客観的なものであり、したがって普遍的なものであることである。

すなわちミードにとって重要なのは、あくまで普遍的論理であり、主観的なものではない。創発性や創造性は、実はミードにとっての関心の中心を占めるものではない。普通の創造は確かに個人の行為を起源とするが、ミードにとって重要なのは、それが他のすべての成員に共有されるための条件である。

創発性や創造性は究極には、ミードにとって説明の対象であるよりはむしろ、説明の前提であり、結局は説明不可能なものなのである。

「問題は、問題となりえないものを前提としてのみ生ずる」(Mead: 1938, 32)のであり、自己の創造的局面を代表する「I」は、説明不

可能な前提であるがゆえに残余的なものでしかない。このような見方からすれば、社会的行動主義のベースペクティヴは、新たな普通の創造に関しても、重視するのは、仮説の論理構造であり、そこから演繹される行為パターンが、どれだけ多くの個別的事例に適用可能かという、仮説検証の過程であるということになる。ミードにとって、どのように新たな仮説が作られるかを明らかにすることは、まさに創造の概念そのものを否定することになるのである。

#### おわりに

以上要約したような、ミードの社会的行動主義のめざすところは、ブルームアの主張するような主観主義のないし個別主義的方法である。どころか、逆に客観主義的、普遍主義的方法であることは明白である。それは、前段でみたようなベースペクティヴ論と、それにもとづく客観性と主観性、普遍性と個別性、創発性と創造性などの諸概念を背景におくことによってはじめて明瞭に理解しうる。しかしながら、ミードは絶対的のベースペクティヴを排除する余り、いくつかの基本的問題点を残すことになったように思われる。その第一は、客観性に対する主観性の位置づけが余りにわい小化されてしまい、主観と客観のダイナミズムが視界から全く排除されることになったことであり、第二には、そのことによって、創発性、創造性はベースペクティヴ論の内部に組み入れられるのではなく、社会的行動主義のベースペクティヴの前提条件とされていることである。そして第三には、複数の交差する

パースペクティヴの複合体としての多元的な一般化された他者の創造的前進は、自己(ego)の、説明しえない創造的局面としての「I」によって可能になるとされ、そのメカニズムはやはり説明の対象であるよりは、自己や精神の説明の前提であるにとどまるように思われる。しかしながら、これらの問題点は一まずおいても、ミードの社会的行動主義における「普遍性」の概念の意義を、その方法的手続きの中でより詳細に吟味することは、プラグマティズムそのものの特質をより明確にし、その特質と限界を見極める上でも重要であり、シンボリック相互作用論の存在論的基礎を再検討する試みにおいても不可欠であると思われる。マックフェイルとレックスロートは、ミードの社会的行動主義的方法論的手続きを問題にしているが、その議論は、「普遍性」の重要性と意義をその手続きの中で正しく強調しているとは思われない。それはおそらく、彼らが、實在論を觀念論との対立軸の中でのみとらえ、ルイス・ロスマイスのように名目論との対立軸においてらえていないことによる。すなわちミードのパースペクティヴは、觀念論と實在論を克服するところに成り立つが、普通の論理は個人の個別の行為とは無関係に、一般化された他者のパースペクティヴの内部に客観的に實在するのである。この点を踏まえるならば、ミードは、厳密には「行為者の観点に立つ」というブルーマーの方法論を完全に排除するものではないといわなければならない。ただ、ブルーマーはそれのみを強調し、その行為者の観点を説明しうる一般化された他者の普遍的論理の重要性を全く無視しているところに根本的相違があると

G・H・ミードの「社会的行動主義」についての一考察

いうことにならう。

しかしながら、ミードが社会的行動主義の方法を通じて「普遍的論理」の探求への志向をもっているとしても、ミード自身の思想体系の中には「論理学」そのものは見出し出されない。プラグマティズムの特質の一つが、このような論理学的志向の中にあるとすれば、それを探るためにはわれわれは、ミードではなく、自らの論理学的な体系を築き上げたパースの思想に目を向けなければならないであらう。これらの点についての考察は、機会を改めて試みることにしたい。

註

- (1) 一九七三年に D. L. Miller, *George Herbert Mead, Self, Language, and the World*, University of Texas Press, 1973, 44-45 Maurice Natanson, *The Social Dynamics of George H. Mead*, Martinus Nijhoff, 1973 (再版) が出され、一九八〇年に T. W. Golf, *Marr and Mead, Contributions to a Sociology of Knowledge*, Routedge & Kegan Paul, 1980 (原村隆監訳『フランスマ・メード』岩波の水書房 一九八二) J. D. Lewis and R. L. Smith, *American Sociology and Pragmatism*, The University of Chicago Press, 1980 が、それぞれ一九八三年には「メード自身の遺稿集 G. H. Mead, *The Individual and the Social Self*, Edited, with an Introduction, by D. L. Miller, the University of Chicago Press, 1983 が出版された(註文は除く)。
- (2) このような誤解は Bernard Meier (1961, 1975) の他でもみられ、かなり広く普及しているように思われる。
- (3) ミードのホワイマ・ヘッド解釈は Mead, 'The Objective Reality of Perspective', (Mead: 1932, 161-175) による。
- (4) J・ロッキは第一性質(the first qualities)と第二性質(the second qualities)を区別したが、ミードは、前者を事物に属する本質、後者をそれについての人間の感覚といったロッキの考え方をとらず、どちらもパースペクティヴの中での経験のための、

事物や有機体の前提条件とし、第一性質の経験を接触経験 (contact experience)、第二性質の経験を離隔経験 (distance experience) と呼んだ (Mead: 1938)。

- (5) 接触経験は対象のもつ二つの側面について生じる。一つは、滑らか、粗い、など事物の表面の集合としての側面であり、もう一つは、圧力をもった対象の「内側 (inside)」としての側面である。ミードは、物理的事物の内側に特有な性質を「抵抗 (resistance)」と呼び (Mead: 1938, 108) 人間の反省的行為は、事物の内側を自ら内部に取り込む (ものの役割取得) によって、圧力をもつ事物の抵抗を経験するのである。

(6) ミードは、これを、想像力によって未来と過去をとりこんだ現在とどう意味で「見せかけの現在 (a specious present)」と呼び (Mead: 1932, 173)。

- (7) ミードの社会心理学が関心を示すのは、個人の行為の中でも、その個人が所属する社会集団のすくへの成員として、同じ意味をもつような身振りとしての側面であり、その身振りの意味は、具体的個人のメノンナリテイや主観的经验とは無関係なものである。ハイストミンスが説明するようには、「AがBに対して「ドアを閉めろ」と言うとき、この発語は「Aが要求する」とおりにBがドアを閉める」とを意味するわけではなく、Aの身振りに対して、AとBのどよみも同じ (生理学的) 態度をよびよびよびて反対する」とを意味する (Lewis and Smith: 1980, 141) のびる。この同一の態度は、「疎密に論理的観点からみて、その身振りの全体的意味を構成する」 (Ibid. 傍点引用者) のびる。

(8) ヴェビ「Selected Writings (1961) & Movements of Thought in the Nineteenth Century (1936) など」に収められた諸論文を参照のこと。

- (9) ミードの社会的行動主義は、人間の行為を、意識や精神とつた内的経験から外部にあらわれる側面までを包括する、全体的過程としてとらえることを主張する。そしてこのような内的経験を「プロローチする場合でも「行動主義」という観点をくくせよ」と意味に限定しない限り、行動主義の観点から「プロローチせよ」(Mead: 1934, 5; 訳入) とし、その立場を社会的行動主義と呼ぶ。その特徴は、かかる内的経験を「内省的洞察 (introspective insights)」によってとらえるのではなく、あくまで直接経験的観察によってとらえようとするところにある。しかし社会的行動主義が直接観察の対象とするのは、生理学的心理学のように中枢神経系のメカニズムではなく、社会過程の中にあるものとしての個人の行為であり、その内的経験を進行せしめる社会的条件

にかかわるものとしての身振り、すなわち「有意義シンボル (significant symbol)」としての身振りである。かくして社会的行動主義は、個人の行為を「内部から外部へ」というかわりに、外部から内部へと探求するのであり、いわば社会過程の内部に、かくして内的経験が生成するかを明らかにしようとする」 (Mead: 1934, 8, 註10)。

引用文献

- (1) Blumer, Herbert: 1969, *Symbolic Interaction: Perspective and method*, Englewood Cliffs, N. J., Prentice-Hall.
- (2) Blumer, Herbert: 1987, 'Mead and Blumer, the Convergent Methodological Perspectives of Social Behaviorism and Symbolic Interactionism, *American Sociological Review*, Vol. 45 (June): 409-419.
- (3) Glasner, Barry: 1983, *Essential Interactionism*, Routledge & Kegan Paul, London.
- (4) Lewis, J. David, and Smith, Richard L.: 1937, *American Sociology and Pragmatism: Mead, Chicago Sociology and Symbolic Interaction*, The University of Chicago Press, Chicago and London.
- (5) McPhail, Clark, and Rexroat, Cynthia: 1979, 'Mead vs. Blumer, The Divergent Methodological Perspectives of Social Behaviorism and Symbolic Interactionism, *American Sociological Review*, Vol. 44 (June): 419-467.
- (6) McPhail, Clark, and Rexroat, Cynthia: 1980, 'Ex Cathedra Blumer or Ex Libris Mead? *American Sociological Review*, Vol. 45 (June): 420-430.
- (7) Mead, George Herbert: 1932, *The Philosophy of The Present*, Edited by Arthur Murphy, with Prefatory Remarks by John Dewey, The University of Chicago Press, Chicago.
- (8) Mead, George Herbert: 1934, *Mind, Self, and Society, From the Standpoint of a Social Behaviorist*, Edited, with an Introduction, by Charles W. Morris, The University of Chicago Press, Chicago. (監訳川中野・滝沢田中・中野取訳『精神・自我・社会』青木書店 一九七三)
- (9) Mead, George Herbert: 1936, *Movements of Thought in the Nineteenth Century*, Edited, with an Introduction, by Merritt A. Moore, the University of

Chicago Press, Chicago.

(19) Mead, George Herbert: 1938, *The Philosophy of the Act*, Edited, with an Introduction, by Charles W. Morris, in collaboration with John M. Brewster, Albert M. Dunham, and David L. Miller, The University of Chicago Press, Chicago.

(20) Mead, George Herbert: 1964, *Selected Writings*, Edited, with an Introduction, by Andrew J. Reek, Robbs-Merrill Co., Indianapolis.

(21) Meltzer, Bernard N.: 1964, 'Mead's Social Psychology', in Manis, Jerome G., and Meltzer, Bernard N.: 1978, *Symbolic Interaction: A Reader in Social Psychology*, 3rd ed., Allyn and Bacon, Boston. (pp 15~17).

(22) Meltzer, Bernard L., Pertas, John W., and Reynolds, Larry T.: 1975, *Symbolic Interactionism, Genesis, Varieties, and Criticism*, Routledge & Kegan Paul, London

(23) Miller, David L.: 1973, *George Herbert Mead, Self, Language, and the World*, The University of Chicago Press, Chicago.

(24) Natanson, Maurice: 1956, *The Social Dynamics of George H. Mead*, Public Affairs Press. (改題及び・川柳文庫版『G・H・ミードの社会的心理学』新泉社 一九八三)